

別冊

おいしだものがたり

～資料館資料編～

■金山平三『夕映えの冬最上川』

今回は歴史民俗資料館で開催中の「開館40周年記念企画展 金山平三展」より、展示作品の見どころや作品鑑賞のポイントなどをご紹介します。

金山平三（1883～1964）の作品を、まずは少し離れた所から見てみます。まるで小窓から外の景色を眺めているような錯覚を抱くはず。しかし、どれほど描き込まれているのかと、今度は近づいて凝視してみると、意外なほど細部は省略されていてちょっと拍子抜けするほどです。山や川、木々どうしの境界はおぼろげで、緻密と思えた梢や花々は、かすれや大胆な筆の跡がそのまま対象を表していたりします。写実的でありながらフォトリアリズムのような克明さはなく、画面全体がほんやりとした印象を受けます。金山作品の魅力であるこの不思議な臨場感を、少し紐解いてみましょう。



「君は線で描くだろう、僕は色で描くんだ」

これは金山が、同郷の洋画家小磯良平（1903～1988）に言った言葉です。

本来自然に輪郭線は存在しません。線で描くとは、形の定まらない対象に明確な形を与えることです。小磯良平は人物画を得意としましたが、その作品ははっきりとしてどこか静謐な印象を与えます。これは画家の意図や技術もさることながら、「線で描く」ことによる効果ともいえるでしょう。

一方色で描くことは、描く対象を色の集合として捉え、画面へと還元することといえます。線によって対象に形を与えない以上、その存在感は曖昧になってしまいます。しかしこの表現を達成すれば、自然に溢れる光を、画家が見たそのままの色として再現することが可能になります。実景を見つめるのは金山平三自身ですから、彼の作品を鑑賞することはそのまま、彼の視覚を追体験していることに他なりません。不思議な臨場感の秘密は、この「色で描く」金山の意識に端を発しているといえそうです。

さて、それでは『夕映えの冬最上川』を改めて鑑賞してみます。キャンバスに描かれるのは、大橋上から最上川の上流を臨んだ景色です。西日を受け鶉色に浮かびあがる遠方の山々や、夕焼け空を映す川面の揺らぎ、岸辺の雪の濃淡が絶妙な色使いで表現されています。24.0cm×34.5cmと小さな作品ながら、それを感じさせない奥行きと広がりを感じます。離れて見ると息を飲むほどに鮮明なのに、やはり近づくと全体がぼやけ、かえって焦点を見失ってしまいそうです。

「開館40周年企画展 金山平三展」は6/10（日）まで



町の人口 平成30年5月1日現在

世帯数	2,355戸	(+1)
総人口	7,200人	(-12)
男	3,530人	(-4)
女	3,670人	(-8)
(4月中の異動)		
出生	2人	転入14人
死亡	5人	転出23人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

楽がき帳

ニユース玉手箱で紹介した川前地区のギフチョウ・ヒメギフチョウ産卵数調査に同行してきました。今回の調査は4地点で行われ、うち1か所は昨年地区の皆さんが杉林を伐採した山の斜面。ここでは幼虫の食草も豊富で多くの卵が見つかりました。チョウは日のあたる食草に卵を産む習性があり、木の伐採と下草刈りのおかげで産卵に適した場所が増えたのだそうです。

雨が降ったあとの山の斜面はとても滑りやすく、あちこちに生えている食草を誤って踏まないよう、慎重に歩きながら1枚1枚葉をめぐっての調査。次第に冷たい風が吹き始めて、終盤には根気も体力もない私はへとへとに。こうした地道な取り組みが地域の自然環境を守っているのだと実感しました。
(あ)